

研究所だより

第464号
2023年12月 4日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015



“ 雪やこんこ あられやこんこ
降っては降っては すんずん積もる
山も野原も わたぼうしかぶり 枯木残らず 花が咲く
雪やこんこ あられやこんこ
降っても降っても まだ降りやまぬ
犬は喜び庭かけまわり 猫はこたつで丸くなる ”
『雪』 1911年(明治44年) 文部省唱歌



～ 冬の到来 おおさむこさむ ～

今年もはや12月。暦の上では7日は「大雪」です。「北風が吹いて雪が激しく降り始める頃」という意味で「大雪」とされています。江戸時代の暦の解説書『こよみ便覧』では「雪いよいよ降り重ねる折かなれば也」と説明されています。この時期から日に日に寒さが厳しくなっていきます。またブリやハタハタなどの冬の魚の漁が盛んになります。冬が深まっていく季節、栄養豊富な旬の食べ物をたくさん食べて、体の芯から温まって元気に過ごしましょう。そして、引き続き感染症対策も心がけましょう。

.....
「指導と評価」12月号より

～SOSを言える環境づくりとSOSの受信力～

いしくま としのり
石隈 利紀
(東京成徳大学教授)

子どもが「助けて」「相談があります」というSOSを発信する力を育てたい。

●子どものSOSとは

しかし、子どものSOSは言語的な表現だけではない。子どもは学習面、心理・社会面、進路面、健康面などの学校生活で非言語的にSOSを発信している(石隈、1999、図1)。例えば、「授業中眠ることの増加」は、学習意欲の低下、学級の安心感の低下、ゲーム依存、あるいはヤングケアラーとしての夜中の家族の介護かもしれない。さらに子どもの「死にたい」「消えたい」という生命に関わるSOSもある。そしてリストカッティングなど自分を傷つける行動は、アピールではなくSOSと理解するのが適切である(松本、2015)。子どものSOSの受信には、大人の共感性が問われている。

学習面	心理・社会面	進路面	健康面	全般
勉強への取り組みの変化	学校での暗い表情	得意なことへの減少	けがや病気の頻り	不規則な生活
テスト成績の急激な低下	自分への否定的イメージ	決心がつきにくい	頭痛や腹痛	理由の不明確な欠席
授業中投げやりな態度	学級内の孤立	進学についての態度変化*	眠そう顔	事件の発生
授業中ぼんやり	家族との関係の変化	食事の様子の変化	遅刻・早退	
授業中眠ることの増加	教師に対する態度の変化	服装や言葉遣いの変化	遅刻・早退	
授業中ぼんやり	学級内の孤立	服装や言葉遣いの変化	遅刻・早退	
授業中眠ることの増加	学級内の孤立	服装や言葉遣いの変化	遅刻・早退	
授業中ぼんやり	学級内の孤立	服装や言葉遣いの変化	遅刻・早退	
授業中眠ることの増加	学級内の孤立	服装や言葉遣いの変化	遅刻・早退	
授業中ぼんやり	学級内の孤立	服装や言葉遣いの変化	遅刻・早退	

図1 SOSチェックリスト

*は、中・高校生のみ。

●なぜ子どものSOSの受信が重要か

第1に、子どもの権利を守る機会となる。「こども基本法」が2023年4月に施行された。すべての子どもが、自分の権利として、自己に直接関係するすべての事項に関して意見を表明する機会が確保されること、そして意見が尊重されることが明記されている(第3条基本理念)。子どものSOSは、子どもの緊急の意思・意見の表明である。大人は子どもが安心してSOSを表明する機会を確保する必要がある。子どもと話す時間を確保したい。

第2に、子どもの苦戦に気づく機会となる。チーム学校を通して、すべての子どもへの質の高い心理教育的援助サービスをめざす(石隈・家近、2021)。そこで苦戦が始まった子どもや苦戦するリスクの高い子どもの学校生活などのSOSを受信することで、タイムリーなチーム援助(石隈・田村、2018)が提供できる。

第3に、子どものSOSは学校を変える機会となる。例えば子どもの学習意欲の低下(SOS)は、教員の教え方と子どもの学び方のマッチングのずれが大きい可能性を示唆する。学びのユニバーサルデザイン(UDL)の導入などによる授業の改善の機会となる。また子どものイライラの増加は、学校生活を安心して過ごせていない可能性を示す。学級経営を見直す機会となる。すべての子どもの行動には意味があるのである。そして子どものSOSは、教育システムを見直す機会になり、子どもが発達する環境の改善に役立つ。

●子どものSOSの発進力とは

第1に、被援助志向性を育てることである。被援助志向性は、「学校生活などにおいて苦戦するとき、自分で解決しようとしても解決できない場合、他者に援助を求めるかどうかについての認知的枠組み」である。一方で子どもには援助を求めることへの抵抗がある。それはおもに「汚名への心配(例：相談したら問題児だと思われる)」と「呼応性の心配(例：相談しても問題を解決してくれない)」の2要因であると思われる(水の・石隈・田村、2006)。「困ったときはSOSを出して、援助を受けて恥ずかしくない」環境をつくること、また子どものSOSの発進にこたえないことで子どもの信頼を獲得することが求められる。

第2に、子どもが自分の状況をモニターし、危機を察知する力を育てることである。SOS発信のプロセスの学習を援助することである。子どもが問題状況に取り組むときには日頃の対応でうまくいかないことがあり、心理的に不均衡になる。これが「危機」である。子どもは危機を察知できる時、SOSの発信につながる。

第3に、自己主張力を育てることである。SOSの発信は、自己主張である。「私を、今、助けて」と声を出すことは勇気がいる。自己主張能力を育てることがSOSの発信の基盤となる。子どもが助けてと言ってきたり、悩みや愚痴を打ち明けたり、ときにはリストカットの跡を見せたりしたときは、「よく言えたね」「よく相談できたね」と言う。それは子どもの自己主張を認め、今後の自己主張を促進していることになる。

●教職員の「子どものSOS」の受信力を高める

第1に求められるのは、SOSが出しやすい心理的安全性の高い学級・学校環境づくりである。子どもの失敗は「ナイスライ」として認める。また子どもの多様性(違い)を発見し尊重する。第2に求められるのは、大人のSOSに気づく力を高めることである。子どものSOSはさまざま形で表現されるので、SOSチェックリスト(図1)や子どもが記入するアプリの活用が望ましい。第3に、子どものSOSにタイムリーに応じる行動が求められる。この際、教職員の心の中にある「大丈夫リスト」の点検が重要である(石隈、1999)。教職員は、子どもと関わる経験から、「きちんと学校にきているから大丈夫」「笑顔が見られるから大丈夫」「成績がよいから大丈夫」などの大丈夫リストを自分なりにつくっている。一人でそのリストを使って、子どものSOSをスクリーニングしてしまいがちである。そのため、子どものSOSに胸騒ぎがしても、それをチームで共有せず、自分のなかで解消してしまうのである。

●さいごに

当事者研究の第一人者である熊谷（2020）の「自立とは依存先を増やすこと」であるというメッセージを共有したい。子どもがSOSを出せる安全で安心感のある環境をつくり、教職員も保護者とチーム学校として、子どものSOSに対応して援助したい。

<第73次土佐清水市教育研究集会・半日教研②>

11月 1日（水）に授業等を主体とした半日教研が開催されました。各部会（情報教育・教育相談・養護・事務）の研修（公開授業・研究協議・情報交換等）の様子を紹介します。



〔情報教育部会〕
「日本の工業生産の今と未来」
三崎小学校5・6年
授業者：増山 賢太 先生
研究協議・情報交換
・ICTの活用（複数モニターの使用等）
・データ整理の仕方等



〔教育相談部会〕
「自立活動」
清水中学校1-A
授業者：小橋 歩 先生
研究協議・情報交換



〔養護部会〕
1. 報告・協議
2. 教材作成…3部作目ポスター
「タイムマネジメントについて」
3. 実践交流
①下ノ加江小・研究授業の報告
②清水中・保健環境部啓発活動の報告等



〔事務部会〕
1. 学校事務冊子のプレゼン作成
2. 自分の成長時間（4つのマトリクスワークシート）演習
10個の内容を重要度、緊急度別にマトリクス分けし、確認しあった等
3. 情報交換等

